

第一章 前齋宮の物語 前齋宮をめぐる朱雀院と光る源氏の確執

[第一段 朱雀院、前齋宮の入内に際して贈り物する]

*前齋宮の御参りのこと(さきのさいぐうのおんまゐりのこと、前齋宮の入内について)、中宮の御心に入れて(ちゅうぐうのみこころに入れて、中宮がご熱心に)催し聞こえ給ふ(もよほしきこえたまふ、催促申しなさいます)。 *注に<源氏三十一歳春の物語。源氏二十九歳の秋、六条御息所死去し、一年の喪中期間をおいて、その娘前齋宮が冷泉帝に入内する話題。>とある。濡標巻で六条御息所死去後に、光君が中宮に前齋宮の入内を相談する場面があった。其処でも中宮は乗り気で、朱雀院の意向に背くには故御息所の遺言で入内が望まれていた事と、表立っては中宮が前齋宮の後見役に見せかける事が打ち合わされていた。

こまかなる御とぶらひまで(様々な入内用の御供え物まで)、*とり立てたる御後見もなしと思しやれど(用意するような取り立てた後援者も自分の他には居ないと気に掛けなされたが)、大殿は(おほとのは、光君は)、院に聞こし召さむことを憚りたまひて(前齋宮に求婚して居らした朱雀院が御聞きあそばす事に遠慮なさって)、二条院に渡したてまつらむことをも(二条院に御移し申上げることさえも)、このたびは思し止まりて、ただ知らず顔にもてなしたまへれど(特に関係は無さそうな素振りを為さっていたが)、おほかたのことどもは(一通りの入内準備は)、とりもちて親めき聞こえ給ふ(引き受けて親めいたお世話を申しなさいます)。 *「とり立てたる」は前後に修辭させて言い換えた。

院はいと口惜しく思し召せど(朱雀院は前齋宮の入内をととても残念に御思い為されたが)、人悪ろければ、御消息など絶えにたるを(決まった以上の未練は人聞きが悪いので、お手紙などは絶えていたが)、その日になりて(入内当日になって)、えならぬ御よそひども(素晴らしい御装束類に)、御櫛の篋(みぐしのはこ、御櫛入れ)、打乱の篋(うちみだりのはこ、化粧道具箱)、香壺の篋(かうごのはこ、香り壺入れ)ども、世の常ならず、種々の御薫物(くさぐさのおんたきもの、練り香や合わせ香)ども、薫衣香(くぬえかう、衣服用の練り香)、またなきさまに、百歩の外(ひやくぶのほか、広範囲)を多く過ぎ匂ふまで、心ことに調へさせたまへり(心を込めて揃えさせなされて御出ででした)。

大臣(おとど、内大臣が)見たまひもせむにと(御覧にもなろうからと)、かねてよりや思しまうけけむ(以前からお考えになって居らしたらしく)、いとわざとがましかむめり(院の恋心を思い知らせむとの恨みがましいほどの立派さでした)。

殿も渡りたまへるほどにて(光君も御所から前齋宮を六条邸に御迎えに来て居らしたところだったので)、「かくなむ(このようで御座います)」と、女別当御覧ぜさす(女別当が院からの贈り物を光君に御覧に入れます)。

ただ、御櫛の篋の片つ方を見たまふに(ちょっと御櫛入れの一つを御覧になっただけで)、尽きせずこまかになまめきて(この上なく丹念な作りで美しく)、めづらしきさまなり(特別な物でした)。挿櫛の篋の心葉に(さしぐしのはこのころばに、その中にあった髪挿し入れの小箱の熨斗飾りの葉書きに歌が添えられていて)、

「別れ路に添へし小櫛をかことにて、遙けき仲と神やいさめし」(和歌 17 - 1)

「ほろほろこぼれる白い花を、受けて泣いていた愛らしい貴方よ」(意識 17 - 1)

*注にく朱雀院から前斎宮への贈歌。遂げられない恋の怨みを含んだ歌。>とある。「別れ路に添へし小櫛(わかれちにそへしをぐし)」とは、斎宮が8年前に時の帝に伊勢下向の挨拶に御参りした際に帝から賜った「別れの櫛」で、印象的なその場面を賢木巻から拾うと、「斎宮は、十四にぞ成り給ひける。いと美しう御座する様を、麗しう仕立て奉り給へるぞ、いと幽々しきまで見え給ふを、帝、御心動きて、別れの櫛たてまつり賜ふほど、いとあはれにて、潮垂れさせ給ひぬ。」とあった。また、<「別れの櫛」は≪平安時代、斎宮(いつきのみや)が伊勢に下るときに天皇みずから斎宮の髪にさして与えた黄楊(つげ)の櫛。別れのみくし。(大辞林)≫とある。天皇自らという重々しさは、斎宮が天皇の代わりに祭祀を行う事が主要な祭事だったという事を示しているだろうし、実際に身内の息女から斎宮を選んだ事にも依るのだろう。>と、ノートもある。「かこと」は「託言」で、神の御託宣なら尊く畏れ多いが、神が「別れの櫛」を帝の「託言(方便)」と受け止めたという言い方は、軽口ないし冗談の論理構造だろう。更に其れに基いて神は「いさめし」なのだから、此処の「いさめ」は本来の<戒め>の意味では無く<言い掛かりを付けた>という言い回し。「遙けき仲(はるけきなか)」は<遠くなってしまった仲>。つまり、この歌は理屈では<私たちが親しくなれなかったのは、神様が「私の所に代理を立てるために、帝が斎宮に別れの櫛を授けたのだから、私に二人の別れを誓った事に成るんだよな」と戒めた所為かも>という言い方になるが、帝ならではの神の身近さに重さや暗さは無く、朱雀院の歌意は二人の、二人だけの接点だった「別れの櫛」を懐かしんでいるのだろう、と私は受け止める。

大臣(おとど、内大臣の光君は)、これを御覧じつけて(この歌に目を止めなさって)、思しめぐらすに(院の胸中を察しなさり)、いと*かたじけなくいとほしくて(帝の立場の重さを思い知らされ其の御心の機微に直に触れた感慨に)、わが御心の*ならひ(御自分の日頃の心構えで)、*あやにくなる身を(節制無く野放図になっている体を)*抓みて(つみて、自分でつねって反省して)、*「忝く愛ほし」は光君が院の歌から受けた感銘であって、この感銘が在ってこそその以下の反省である。だから、その感銘の内容を踏まえないと文全体の意味を見失う。院は、在位中の祀り御度を通して神を身近に感じた。だから親しそうに神を詠み込んだが、傍目には其れこそが帝の立場の尊さを感じさせる。個人を越えた計り知れない責任の重さを担って祀り御度を励行する帝が親しく神を御思いになると、他者が神を軽んじてみるのとでは、全く次元の違う精神である事を、王家の一員であり時の権力者である光君は実感したのだろう。其の帝が、可愛らしい十四歳の王家の娘に祭事を託すのである。其の荘厳さ、節制の中にある真心を光君は思い知ったに違いない。少なくとも、兄が其の姿勢であろうとしたことは実感したのだろう。そして、それに引き換え自分は御息所の床仕種に王家の雅を追うばかりだった、という文脈である。だがしかし、宮中祭祀だけは残り、加えて形だけになった歌遊びや園遊会で文化継承の責任を負わされ、極めつけの政治利用として予算執行権の無いまま権威の象徴として式典参列を強いられながらも、その文化の内実である肝心の政治権力とそれに基づく発展統合のための社交である色事遊びを封じられた現在の悲しき天皇家にあっては、光源氏の姿こそがむしろ王権の本質を表しているというのは、この物語が切実な今日性を有しているという笑えない皮肉だ。いや、だがしかし、文化の歴史的形状すら継承していない他国には狂信的な教条主義しか残っていないので、この非和合性下の悲劇的世界状況に解決策を見出せる数少ない可能性の一つこそが、今日の日本の皇室形態の中にあるという希少性はヒト種の財産なのかも知れない。それでも、今日の皇室の政治実権の無さを認識するなら、本質は、古い慣習を客観的に評価してその政治的意味を確認した上で伝統格式を重んじるという、姿勢を貫くことにこそ在るのであり、そうした独自の政治様式を築き上げてこそ、科学文化の発展と相俟って、人類が古い宗教体系を乗り越え得る普遍的な世界的指標の一つを提示し得ると予想する。祭祀の形態模写を画像および動画で記録保存することは絶対に必要であり、既に処置されているのかも知

れないが、更とその客観的議題評価を得るための一般公開が、それが形態模写であることと、その撮影時のスタッフやロケーションを含む詳細データを伴って早急に成されなければならない。ポルノは猟奇性や羞恥性を含むので犯罪利用されやすいが、その個体多様性の例示と性戯様式の客観的模式提示は人類に多大な色情的豊かさを提供し、紙出版やネット開発に爆発的な経済効果を上げている。大衆は正直だ。そして、此処が肝心だが、当日の周辺の記念撮影は可であり記録すべきだろうが、儀式そのものは一切の画像記録を残してはいけない。式典は議事ではない。和合の核は信義だ。記録した時点で儀式は模式化し、形骸化して信義を失い結合力が消滅する。客観性の担保は個体の事態に対する組織的構造的な理解を助けるが、個体の主体性は個体の実感に拠る他は無い、ということが机上の限界なのであり、恐らくは人生を生きる楽しみであり厳しさであるのだろう。「今」は今を生きる者にのみ与えられた時間であり、「語る者」は周辺の者に過ぎないのであって、結局は「生きる者」に付き従っていくだけの存在だ。「生きる者」とは、かつては戦争で、民主国家では多分、選挙で、勝った者である。そして今の日本は身分社会ではないので、努力すれば誰でも「語る者」や「生きる者」になれる道がどこかにある、というわけだ。そして、それを探すのも探さないのも自由というわけだ。凄い事だ。話が随分と横道に逸れたが、作者の意図とは離れて、作者の描いた源氏殿と朱雀院との対比で立体提示している王朝論は、かくも今日的な意義を有してしまっている。*「ならひ」は<慣習・習慣>だから、「こころのならひ」は<日頃の心構え>。*「あやにく」は今の「生憎(あいにく)」と思って良さそうだ。「生憎」は主に<折が悪くて不都合>という意味で使うが、<他の事情に関らず我を張る者が居てまもらない>という意味にも使う。此処の「あやくなる」は<我を通して丸く収めない>くらいの意味で、前の「ならひ」と後の「身」に掛かる言い方。*「抓む」は<つまむ、つねる>で、「身を抓む」は言葉としても実際の動作としても<考え方を改めて自分を客観評価する、しようとする所作>なのは古今東西共通らしい。

「かの下りたまひしほど(前齋宮が伊勢へ群行為さった時に)、御心に思ほしけむこと(時の帝であった院が御心に御思いに為った恋心を)、かう年経て*帰りたまひて(帝一代に沿った長年のお勤めを果たして齋宮が都に御帰りに成って)、その御心ざしをも遂げたまふべきほどに(帝の恋心も成就為されようかという今になって)、かかる違ひ目のあるを(こうした横槍で目論見が外れた事を)、いかに思すらむ(どう思って御出でなのだろう)。御位を去り(みくらみをさり、退位なさって)、もの静かにて(いまさら騒ぎ立てることも無く)、世を恨めしと思すらむ(世の儘成らぬを嘆いて御出でだろうか)」など、*賀茂の齋院は何代もの帝に仕えた事もあったが、伊勢の齋宮は必ずしも帝一代ごとに交代した、ということらしい。

「我になりて心動くべきふしかな(自分だったら、我慢できない所だろうな)」と、思し続けたまふに、いとほしく(申し訳なく)、

「何にかくあながちなることを思ひはじめて(どうしてこのように前齋宮を強引に入内させる事を思い付いて)、心苦しく思ほし悩ますらむ(院につまらない御思いをさせて悩ませたりしたのだろう)。つらしても、思ひきこえしかど(閑職の折は恨みに思い申したこともあったが)、また(結局は復職をお許し下さった)、なつかしうあはれなる御心ばへを(親しくて優しい御性格の兄上だと言うのに)」など、思ひ乱れたまひて、とばかりうち眺めたまへり(しばし茫然と為さっていました)。

「*この御返りは(この御返歌は)、いかやうにか聞こえさせたまふらむ(どう御詠みなさるのか)。また、御消息もいかが(また、院の御手紙はどういうものだったのか)」など、聞こえたまへど(などと光君は宮に御聞きなさいましたが)、いとかたはらいたければ(親書を他者に見せるのは憚ら

れたので)、御文はえ引き出でず(取次ぎの女別当は院の御文はお出しませんでした)。*注に
<以下「御消息もいかが」まで、源氏の詞。女別当を介して、前齋宮に申し上げた。「御消息」は朱雀院からの手
紙をさす。どのように書かれていたか、という意。>とある。

宮は*悩ましげに思ほして(宮は不慣れな相聞に困り果てて)、御返りいどもの憂くしたまへど
(御返歌に窮して居らしたが)、*「悩ましげ」は<気分が悪そうに>というのが定説のようだが、恋に不慣れ
と何度も説明されている宮だから、相聞歌の返事に窮したのであり、困り果てて沈んでいたと見るべきだろう。

「聞こえたまはざらむも、いと情けなく(御返事なさらないでは、あまりに失礼で)、かたじけ
なかるべし(恐れ多い事で御座います)」と、人びとそそのかし(と、女房たちが宮に御返事を促
しては)わづらひきこゆるけはひを(心配申し上げている気配を)聞きたまひて(光君は御聞きに
なつて)、

「いとあるまじき御ことなり(それはいけません)。しるしばかり聞こえさせたまへ(かたちば
かりでも御返事申し上げませんと)」と聞こえたまふも(と申しなさるのも)、

いと恥づかしけれど(宮はとても恥づかしかったが)、いにしへ思し出づるに(別れの櫛を賜っ
た日を思い出せば)、いとなまめき、きよらにて、いみじう泣きたまひし御さまを(とても優雅で、
美しく、しみじみと御泣きになった帝の御姿を)、そこはかとなく(その恋心までは良く分からな
いながらも)あはれと見たてまつりたまひし御幼心も(感慨深く拝見申し上げた幼心も)、ただ今
のこととおぼゆるに(昨日の事のように思われて)、故御息所の御ことなど(亡き母御のことなど
も)、かきつらね(次々と連なって)あはれに思されて(懐かしく御思いになり)、ただかく(ただこ
のように)、

「別るとて遥かに言ひし一言も、かへりてものは今ぞ悲しき」(和歌 17 - 2)

「栄え有れとの一言も、今は一人の身には悲しき」(意識 17 - 2)

*注に<齋宮の返歌。「遥かに言ひし一言」は、齋宮下向の儀式で別れの御櫛を挿す時に、「帰りたまふな」という
言葉をさす。齋宮の帰京は、御世交替または親族に不幸があった場合である。齋宮の帰京「帰りて」は朱雀帝の退
位により、「今ぞ」の状況は母六条御息所の死去後の孤独な生活をさす。>とある。不幸は神職にあるまじき穢れ
だが、御世交替は内実はともかくも建前は祝い事である。ということは、「帰り給ふな」は<途中で帰って来為さん
な>という表意に<我が一族に幸あらん事を>という願いを託していることになるので、この歌は「別るとて遥かに
言ひし一言も(栄え有れとの仰せを受けて御世交替の満期奉公を終えて)帰りてものは(都に帰ってきたものの)今ぞ
悲しき(その後の独りの暮らしは悲しいものでした)」という湿っぽさ。是は院への返歌なのだから、「悲しき」は<母
六条御息所の死去後の孤独>よりは、院の贈歌の「遥けき仲」を嘆く共感、少なくとも院がそう読めるものであった、
とは思いたい。それにしても、入内の日に詠むにしてはいやに暗い歌に思える。

とばかりやありけむ(とだけあったようです)。御使の*禄(おんしのろく、宮は院からの使者へ
褒美を)、*品々に賜はず(身分に応じてさまざまに与えて下がらせなさいます)。大臣は、御返り
をいとゆかしう思せど、え聞こえたまはず(光君は、お返事の中身を知りたく御思いでしたが、
さすがにそうは申し上げ為さい兼ねました)。*「禄」は<給与>または<祝儀>。「品々」は<各等級>と

いう名詞、または<いろいろ>という副詞。よって「禄品々に」は<各身分に応じて>と<祝儀をいろいろに>という複意と成る。「禄品々に賜はず」は定型句かも知れない。

[第二段 源氏、朱雀院の心中を思いやる]

「院の御ありさまは(院の御立ち振る舞いは)、女にて見たてまつらまほしきを(女として拝見したい優雅さで)、この御けはひも似げなからず(宮の御物腰も同じ感じで)、いとよき御あはひなめるを(とても良い取り合わせになりそうなものを)、内裏は(うちは、今上帝は)、まだ*いといはけなくおはしますめるに(まだ幼くていらすようなので)、かく引き違へきこゆるを(このように御相手を取り替え申すのを)、人知れず、ものしとや思すらむ(院はご不快にお思いだろうか)」など、 *注に<朱雀院三十四歳、齋宮二十二歳、冷泉帝十三歳。朱雀院と齋宮は結婚するのもも適當年齢のお間柄であるが、冷泉帝はまだ子供であると、源氏は思う。齋宮の冷泉帝入内を強引な政略結婚であることを自ら認めている。>とある。

憎きことをさへ思しやりて(気が引ける事まで御考えになって)、胸つぶれたまへど(自責の念を御覚えになったが)、今日になりて思し止むべきことにしあらねば(今になって思い止まれる様な事では無いので)、事どもあるべきさまにのたまひおきて(入内の作法式次第をご説明なさって御置きになって)、むつまじう思す(親しくお思いの)*修理宰相を(しゅりのさいしやう、修理大夫に)詳しく仕うまつるべくのたまひて(一つ一つ宮の案内役を勤めるように命じなさって)、内裏に参りたまひぬ(御所に参上なさいました)。 *「宰相」は参議。名目上は政務官で行政官よりは上位だろうが、「修理職(しゅりしき)」は御所の造営修理を行う大工集団だから、元々政治に関らない蔵人筋で、内大臣にしてみれば気の置けない使用人だったのだろう。ただ、棟梁というべき長の修理大夫(しゅりだいぶ)ともなれば、実質で文化の担い手の自負もあったろうし、対外的な地位も帝側近に相応しい雲上人ということだろう。何しろ従四位下の宰相である。

「うけばりたる親さまには、聞こし召されじ(表立った親代わりには、お思い頂かないように)」と、院をつつみきこえたまひて(院にご遠慮申しなさって)、御訪らひばかりと(親役を修理大夫にさせて光君自身はただの見守り役だと)、見せたまへり(見せ掛けなさっていたわけです)。

よき女房などは、もとより多かる宮なれば(抜きん出た女房たちが元々多く居る宮中に)、里がちなりしも参り集ひて(休暇中のものまで参り集いて)、いと二なく、けはひあらまほし(宮の参内を迎える御所はまたと無く、如何にも王家たる華やぎでした)。

「あはれ、おはせましかば(ああ、御息所が生きていらしたら)、いかにかひありて、思し(どれほど願いが適ったと晴れがましく御思いになって)*いたづかまし(喜んでお世話なされたことだろう)」と、昔の御心ざま思し出づるに(生前の御慈しみを偲べば)、 *「いたづく(労づく)」は<骨を折る、苦勞する>とあり、さらに<親切に世話する、労わる>ともある。「まし」は「いかに(甲斐ありて)」を受けた仮定想起を感嘆する助動詞なので、「いたづかまし」は<骨を折りたがったことだろうー労を惜しまずに喜んで世話したことだろう>、ということだろうか。

「おほかたの世につけては(およその世事の計らいに)、*惜しうあたらしかりし人の御ありさまぞや(優れているのでどんなにか亡くして惜しまれる御人柄だったことだろう)。さこそえあら

ぬものなりけれ(諸行事にあれほどの配慮は中々出来ないものです)。よしありし方は、なほすぐれて(作法の心得については、特に造詣が深くいらして)」、物の折ごとに思ひ出できこえたまふ(と折節の式典の度に大臣は思い出し申しなさいます)。 *「をしうあたらし」は、「惜しう惜し(得難かったので残念な)」よりも「愛しう惜し(優れていたもので残念な)」の方が意味も漢字も重ならない。

[第三段 帝と弘徽殿女御と齋宮女御]

中宮も内裏にぞおはしましける(中宮も御所にいらして御出ででした)。主上は、めづらしき人参りたまふと聞こし召しければ(帝は新しい妃が参内なさると御聞きあそばして)、いとうつくしう御心づかひしておはします(とても愛くるしく緊張していらっしゃいます)。ほどよりはいみじうされ(歳よりはずっと勝って)おとなびたまへり(大人びていらっしゃいます)。

宮も(中宮も)、「かく恥づかしき人(このように気後れするほど立派な妃が)参りたまふを(入内なさるのだから)、御心づかひして、見えたてまつらせたまへ(その御積りで、御会い下され為さいませ)」と聞こえたまひけり(と帝に申し上げなさいました)。

人知れず(帝は内心で)、「大人は恥づかしうやあらむ(大人の妃では気が引けそうだ)」と思しけるを(と御思いでしたが)、いたう夜更けて参う上りたまへり(新妃はだいぶ夜更けになってから参上なさいました)。

いとつつましげにおほどかにて(新妃はとても静かでおっとりなさっていて)、さきやかに(小柄で)あえかなる(弱々しい)けはひのしたまへれば(雰囲気をなさって居らしたので)、いとをかし(なんか優しそう)、と思しけり(と帝は御思いになりました)。

*弘徽殿には(こうきでんには)、御覧じつきたれば(だいぶ前に御見えしていたので)、睦ましうあはれに心やすく思ほし(親しく自然に気安く御思いなさり)、これは(この方には)、人ざまもいたう湿り(物腰もずいぶん落ち着いていて)、恥づかしげに(どこか気構えて)、大臣の御もてなしもやむごとなくよそほしければ(大臣の接し方も丁重で堅苦しいので)、あなづりにくく思されて(気楽には御思いになれず)、御宿直などは等しくしたまへど(御同宿は等しくなさいましたが)、うちとけたる御童遊びに(ふざけ合う様な子供じみた遊びのお相手に)、昼など渡らせたまふことは(帝が日中にお寄りになるのは)、あなたがちにおはします(あちらの方ばかりで御座いました)。*注に<弘徽殿女御、権中納言の娘。冷泉帝より一歳年上、十四歳。「滯標」巻で入内、既に二年を経過。冷泉帝の両妃に対する複雑な心境を長文で語る。>とある。

権中納言は(ごんちゅうなごんは)、思ふ心ありて聞こえたまひけるに(摂政に就く目論見で御息女を入内申しなさって居らしたので)、かく参りたまひて(このように比肩する新妃が参内なさって)、御女に競ろふ様にて侍ひ給ふを(おんむすめにきしろふさまにてさぶらひたまふを、我が娘と競うように帝に御仕え申しなさるのを)、方々にやすからず思すべし(何かにつけて心穏やかならず御思いのようでした)。

[第四段 源氏、朱雀院と語る]

院には(院に於かれては)、かの櫛の篋の御返り御覽ぜしにつけても(あの櫛入れに添えた贈歌に対する齋宮の御返歌を御覧になった事からしても)、御心離れがたかりけり(帝の新妃への思いを断ち切れずに居らした様でした)。

そのころ、大臣の参りたまへるに(内大臣が院に参りなさることがあったので)、御物語こまやかなり(院は御話しを詳しく為さいました)。ことのついでに、齋宮の下りたまひしこと(齋宮が下向なされた時の様子も)、先々ものたまひ出づれば(以前にも御話しになっていて)、聞こえ出でたまひて(また御話しになったが)、さ思ふ心なむありしなどは(その時に恋心を抱いたことなどは)、えあらはしたまはず(決して打明けなさいません)。

大臣も、かかる御けしき聞き顔にはあらで(院の恋心には気付かない顔で)、ただ「いかが思したる(この度の新妃入内を如何お思いですか)」とゆかしさに(と院のお気持ちを知りたさに)、とかうかの御事をのたまひ出づるに(かれこれと入内の際のご様子を御話しなされると)、あはれなる御けしき(院の感慨深そうな御表情から)、あさはかならず見ゆれば(軽々しいお気持ちでは無いと見て取れたので)、いといとほしく思す(とてもお勞しく御思いでした)。

「めでたしと、思ほし染みにける御容貌(院が素晴らしいと御思い込みなさいている新妃のご器量は)、いかやうなるをかしさにか(どのような美しさなのだろうか)」と、ゆかしう思ひきこえたまへど(大臣は見てみたく御思い申しなさいましたが)、さらにえ見たてまつりたまはぬを(入内なさいた今さらにはもう拝見御出来為されないのを)、ねたう思ほす(惜しく御思いになります)。

いと重りかにて(とても重々しく)、夢にもいはけたる御ふるまひなどのあらばこそ(少しでも子供っぽい仕草などをお持ちなら)、おのづからほの見えたまふついでもあらめ(どこかでその一端が見えることもあろうに)、心にくき御けはひのみ深さまされば(礼儀正しい作法ばかりが深まってゆくので)、見たてまつりたまふままに(拝見申しなさいるにつれて)、いとあらまほしと思ひきこえたまへり(大臣はますます宮妃を皇后に相応しいと御思い申しなさいていました)。

かく隙間なくて(このように忙しく)、二所(ふたところ、弘徽殿と宮妃が)さぶらひたまへば(帝に侍り付いていらしたので)、*兵部卿宮、すがすがともえ思ほし立たず(思うようには御息女の入内を実行なさいり為されず)、「帝、おとなびたまひなば(御成人なされば)、さりとも(今のように)、え思ほし捨てじ(娘をお見捨てなさいるまい)」とぞ(と望みを繋いで)、待ち過ぐしたまふ(入内の機会を待つて過ごして御出ででした)。二所の御おぼえども(御二人の妃は)、とりどりに挑みたまへり(色々な場面で帝の御情愛を競い合っていました)。*兵部卿宮は中宮の兄宮なので、帝の伯父宮になる。また、紫の上の父宮でもあるが、内大臣との仲は疎遠。